

Service - not self その解釈の誤り

ステンハマーRI 元会長はRI テーマとして「Service above self」を選びました。実はこの言葉は 1920 年の国際大会で始めて公式の場に登場し、その後紆余曲折を経て 1950 年の国際大会における決議 50-11 によってロータリー・モットーとして正式に採択されたものです。こう言った歴史的な経緯を知らない今から 100 年後のロータリアンが、

「Service above self」はステンハマーが提唱した言葉だと錯覚する可能性を、完全に否定することはできません。

実は「Service-not self」にもまったく同じことが当てはまるのです。この言葉はフランク・コリンズが提唱した言葉だと信じている人が多いようですが、すでにミネアポリス・クラブに定着していた

「Service-not self」という言葉を、1911 年のポートランド大会のエキスカッションとして開催されたコロンビア川をさかのぼる船旅の中で行われた即興演説の中で、たまたまフランク・コリンズが引用したに過ぎないのです。

哲学的な意味をこめて自らが創造し提唱した言葉、すなわちアーサー・シェルドンの「He profits most who serves best」とは本質的にその意味合いが違うことを理解しておく必要があります。

「Service-not self」に関するさまざまな間違いの元凶は、1966 年に元シカゴ・クラブ会員であったオーレン・アーノルド Oren Arnold が書いた「Golden Strand」の誤った記述と、それをそのまま鵜呑みにしてさも真実のように語り続けた一部のロータリー指導者にあります。ちなみに日本の千種会では、この「Golden Strand」の内容をそのまま講義しています。

「Golden Strand」はロータリーの雑学が満載されていて、読み物としてはとても面白いものですが、所詮後世の人が伝聞をまじえながら書き綴った二次文献、ひょっとしたら三次、四次文献に過ぎませんから、その内容が正しいかどうかを、一次文献にさかのぼって確認した上で引用しなければ、危険千万な代物なのです。

「Golden Strand」のこの部分を、私の翻訳でご紹介します。

その日に講演者の一人が、ミネアポリス・クラブの弁護士であり会長のベンジャミン・フランク・コリンズ B. Frank Collins であった。彼の演説は命令調で個性的であり、うるわしき 8 月の朝のように力強い話しぶりだった。彼が話しを締めくくったとき、人々はただうっとりとして彼の演説に聞き入っていた。

---中略---

二度あることは三度であった。奉仕のテーマが、再び、短い言葉で宣言された。代議員た

ちは直ちに、その言葉に飛びついた。

実際、この演説は、アーサー・シェルドンの有名な宣言、**“He profits most who serves best”** を最初に聞いてから、僅か数分以内になされたものであった。

しかし、このより短い叙述は、再びロータリアンの心を打ち、各クラブは両方のモットーを採用することを決定した。

---中略---

“Service, not self”

そう、何れにせよ、自己の存在を考えることが、まったく悪いわけではない。例えば、人間は自尊心を持つべきだし、自分自身を守らなければならない。もし自分自身が零落すれば、奉仕することなどできるわけではない。従って、**“Not Self”** が、何を意味しているかを理解することは、まったく難解である。自分自身を二の次にしておくのは良いとしても、それを完全に否定するのはどうかと思われた。

「よし、それなら **“Service Above Self”** にしたらどうだろうか？」誰かが意気揚々と、適切な提案をした。

「それは良いね！」

別の人が叫んだ。たぶんそれは、販売の専門家アーサー・シェルドンの興奮した声であったに違いない。

「それはよい方針であり、すべてを言い尽くしている。」

明らかに、彼の発言は正しく、その提案は満場一致をもって採択された。そこで、数カ月後には、**“Service Above Self”** は多くのロータリーのレターヘッドやパンフレットや演説原稿や宣言文に用いられはじめた。更にしばしば、モットーは **“Service Above Self”** と **“He Profits Most Who Serves Best”** が組み合わせられて印刷された。

下線を引いた部分が間違った記述です。私はそれを確認するために 2002 年 1 月にワン・ロータリー・センターの資料室を訪れて、そこでフランク・コリンズのスピーチ原稿を見つけました。

その原稿には「自分の職業は果物の卸売り業者である」ことと

「**Service-not self** はミネアポリス・クラブが設立された当初から使っていた言葉」であることが明記されています。

コリンズがスピーチをしたのは 1911 年 8 月 22 日であり、シェルドンのスピーチ原稿がチェスレー・ペリーによって代読されたのは同年の 8 月 23 日ですから、「アーサー・シェルドンの有名な宣言、**“He profits most who serves best”** を最初に聞いてから、僅か数分以内になされたものであった。」という記述は明らかな間違いです。「**He profits most who serves best**」はロータリー宣言の結語として採用し、全文を配布することが、この大会で採択されたと大会議事録

(公式文献)に記載されていますが、**Service-not self** については何の記述もありません。従って「両方のモットーを採用することを決定した」という記述は間違いです。

さて、「Service-not self」の真意については、コリンズのスピーチ原稿を分析することによって、誰でも容易に理解することができます。残念なことにはこの原稿は、私が 2002 年に発見するまでは誰も見た人はいなかったらしく、これを書いた本人の原稿を見ることなく、

「Golden Strand」の「そう、何れにせよ、自己の存在を考えることが、まったく悪いわけではない。例えば、人間は自尊心を持つべきだし、自分自身を守らなければならない。もし自分自身が零落すれば、奉仕することなどできるわけではない。従って、「Not Self」が、何を意味しているかを理解することは、まったく難解である。自分自身を二の次にしておくのは良いとしても、それを完全に否定するのはどうかと思われた。」という記述をそのまま信じて、「Service-not self」を宗教色の強い自己犠牲の奉仕だと説く、ロータリーの指導者が未だにいることは、非常に残念なことです。

コリンズのスピーチ原稿は長文なので、ここで前文を紹介することは避けませんが、この概要は次の通りです。

ミネアポリスにはすでにパブリシティ・クラブという一人一業種制度のクラブが存在しており、その会員をベースにしてミネアポリス・ロータリークラブが設立されました。ロータリークラブの組織では、なすべきことはただ一つであり、それを正しく始めなければなりません。正しく始めるためには、ただ一つの方法しかありません。自らの利益が得られるかも知れないと思って、ロータリーに入ってくる人たちは間違った部類の人たちです。それはロータリーではありません。ミネアポリス・クラブによって採用され、当初から定着している原則は「Service-not self」です。

例会のチケットを毎週異なった会員の事業所で販売することによって、他の会員が、その会員の事業所を訪れて親睦を深めると同時に、その会員との取引を拡大することができます。

会員同士の取引や紹介によって事業を拡大してゆくことは非常に重要なことですが、これには物理的な限界があります。したがって今後はその対象をロータリアン以外にも広げていく必要があります。

このスピーチ原稿を分析すれば、「Service-not self」とは決して自己を犠牲にして他人に奉仕することを強いているのではなく、従来から行っていた会員同士の相互扶助をさらに広げると共に、ロータリアン以外の人にもその対象にしようということです。

ミネアポリス・クラブが提唱した「Service-not self」というフレーズは、高い次元の人道的奉仕活動を表しているものではなく、従来はロータリアンのみが独占していた商取引を、ロータリアン以外の人にもシェアしようという、シェルドンの「He profits most who serves best」に極めて近いスローガンだと考えることができます。

私の友人が直接ミネアポリス・ロータリークラブと接触して、フランク・コリンズの評価を聞いたところ、クラブ内で彼の業績を評価している人はほとんどいないという回答が返ってきました。しかし、その後 1915 年に同じミネアポリス・ロータリークラブのアレン・アルバートが RI 会長に就任し、再び一時期「Service-not self」という言葉が使われるようになりましたが、彼がどのような意図を持ってこの言葉を使ったかはわかりません。

しかし 1910 年代という時代背景を考えてみる必要があります。アメリカン・ドリームの名を借りた、極端な自由競争の時代です。ありとあらゆる策を弄しながら、金を儲けることに狂奔した時代です。ロータリーが事業経営の中に職業奉仕理念を取り入れて、その法則にのっとった正しい事業経営をすれば、必ず事業の継続的な発展が得られることを実証したからこそ、皆が先を争ってロータリー活動に熱中したのです。一部の人が言うように「Service-not self」が自己を犠牲にして他人に奉仕することを意図する言葉だとすれば、この言葉に魅力を感じてロータリー運動に参加する人は皆無であったことだけは確かです。

「Service above self」がシェルドンの創作であったという説にも疑問があります。私の調査によれば、現存するシェルドンの文献は、1910 年、1911 年、1913 年、1921 年の大会スピーチ、The Rotarian に対する 3 回の投稿です。私はそのすべてを翻訳しましたが、そのいずれの内容も「He profits most who serves best」に関する解説に終始しています。もし、「Service above self」がシェルドンが提唱した言葉ならば、どこかにこの言葉が使用されているはずですが、シェルドンのいずれの論文の中にも「Service above self」という言葉はまったく使われておらず、使われている言葉は「He profits most who serves best」のみであることから、「Service above self」がシェルドンの創作ではないことは 99.99%の確率で正しいものだと断言できます。

2007.3.12